

# 方向

第一七〇号 一九九五年四月二〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

## 李賀歌詩編

(訳注稿 五) 1995 04 11 原田憲雄

(二〇一八)

### 大堤の曲

大堤曲

〔大堤の曲〕<sup>〔だいてい きょく〕</sup> ・大堤は、湖北の大会襄陽を漢水から護るために築かれた堤の名で、その港、また港にできた遊郭が、その名で呼ばれるようになった。四四九年、宋の随王の劉誕が雍州刺史として襄陽に赴任したとき大堤で遊び一朝襄陽城を発し、暮れに大堤に至りて宿る。大堤の諸女兒、花艷郎の目を驚かすなど九首の歌を作った。これが「襄陽楽」として流行し、梁の簡文帝も雍州三曲の一つに大堤をうたい、これらの歌とともにその廓は長江を上下する旅人の憧れの的となり、下流の揚州の古来の遊郭も圧倒された。そこで劉誕の作の一つに「人は言う襄陽楽しと、楽しみ作るも儂が処に非ず。星に乗り風と流れを冒し、儂に揚州に帰り去れ」という。賀の曲も、揚州の横塘の遊女が、客に「大堤などに行くな」といっているのである。

(二〇一八)

横塘のあたしの家

〇二 妾家住横塘

赤いカーテンいっぱいの 木犀の香り

〇三 紅紗滿桂香

青い雲が 頭の上でむすんだ あたしのたぶさ

明るい月は あなたがつけてくださった 耳飾り

蓮の葉に風ふき起こり

長江のほとりは春

大堤の廓では

北の客が居続けだって

鯉の尾のあつものを召しませあなた

猩猩のくちびるのなますはあたし

行かないで襄陽なんぞ

緑の港に帰る帆の少ないものを

きょうの菖蒲の花さんも

あしたはカエデじいさまよ

〇三 青雲教縮頭上髻

〇四 明月與作耳邊瑣

〇五 蓮風起

〇六 江畔春

〇七 大堤上

〇八 留北人

〇九 郎食鯉魚尾

一〇 妾食猩猩脣

一一 莫指襄陽道

一二 綠浦歸帆少

一三 今日菖蒲花

一四 明朝楓樹老

〇一 〔妾の家は横塘に住す〕 ・妾 女性の自称。 ・横塘 むかしの揚州の中心地にあたる南京（江蘇）の西南の堤、その港、港にある遊郭、などの名。呉均「妾が家は横塘の北」（和蕭洗馬子顯古意） 崔顥「妾は住して横塘に在り」（長干行）

〇二 〔紅紗 桂香 満つ〕 ・紅紗 きれないの薄絹のカーテン。紗を楽府詩集は「紗」とするが、誤り。 ・桂香 木犀の香り。いい匂い、ということ、植物のモクセイに拘わることはない。

〇三〔青雲せいうん 縮ちぢねしむ 頭上けいじやうの髻けい〕 ・青雲教縮 青い雲を束ねさせる。教は使役の助動詞。雲教を文苑

英華は「絲学」とするが、よくない。

〇四〔明月めいげつ 与たまに作なす 耳辺じへんの璫とう〕 ・璫 耳飾りの玉。傳玄「頭には金步揺きんほよろを安じ、耳には明月璫めいげつとうを繫

く」(有女篇艶歌行) 子夜「玉釵明月の璫」(四時歌春歌)

〇五〔蓮風れんぷう 起おこり〕 ・蓮風 蓮の葉を吹く風。

〇六〔江畔かうはん 春はるなり〕 ・江畔 長江のほとり。

〇七〔大堤上おほつゑじやう〕 ・大堤上 大堤の廊くらわには。

〇八〔北人留ほくじんちゆうまる〕 ・北人留 南朝では北朝に対する敵意から、北の人を僮人そうじん、僮鬼などといった。僮

は、賤しくてこすからい、という意。南北が統一された後も、呉の人は長安や洛陽の人を僮字をつけて

呼んだ。楚は長江中流地帯を指すが、ひっくりかえりて僮楚と呼んだ。襄陽は楚である。この詩の「北人」

は僮人や僮楚にあたる。「留」とは、留連で、居続けのこと。楊巨源も「北人多く識る緑雲鬢」(大堤

曲) というから大堤は北人の客の多いことでも知られたのだろう。南京は呉の中心で、横塘はその花街。

女はもとより呉人だから、「北人留」には、憎しみや妬みがこめられていて、あんな連中ののさばると

ころが、あなたのような右様に何が楽しくありますものか、と言っているのだ。

〇九〔郎ろうは食くらえ 鯉魚りぎよの尾〕 ・郎食 郎は、且那とか若且那とかの意。食は、召し上がれ。 ・鯉魚尾

鯉は仲農経が「魚の王」と呼び、古楽府には「客は遠方より来たり、我に双鯉魚すわうりぎよを遣おくる。：：中に尺

素書あり。上に言う餐飯さんぱんを加えよ、下に言う長く相憶あひおもうと」(飲馬長城窟行) というように愛情を伝え

る魚とされる。詩経に「豆まめに其れ魚いしを食たらう、必ず河かの鯉りならんや」(陳風衡門) というように、鯉だ

って北の黄河のものとは限らない、横塘の鯉の尾のコンソメは絶対よ、などといって勧めているのかもしれない。

一〇「妾は食う 猩猩の唇」 ・ 妾食 あたしはいただくわ、という意。妾食を文苑英華が「与客」とするが、よくない。・ 猩猩唇 呂氏春秋に「肉の美なるは猩猩の唇」（本味）といい、その注に「猩猩は獸の名なり。人面狗軀にして長尾」 グロテスクな感じがするが、今は日本の女性でも牛の舌を賞美する。・ 前の句とこの句を、大堤の女のこととする解釈があるが、どうだろう。

一一「指すこと莫かれ 襄陽の道」 ・ 襄陽へ行こうなどと言わないで。

一二「緑浦 帰帆 少なり」 ・ 緑浦 緑の水をたたえた浦べ。李益「鴛鴦は緑浦の上」（長干行） 緑を文苑英華は「渌」とする。意味は同じ。「緑」とする本があることを王琦がいう。・ 歸帆 少 いったん去ったら帰ってくる客が少ない。

一三「今日 菖蒲の花」 ・ 今日 あなたは菖蒲の花のように美しいが。古楽府「歌舞の諸少年、娉婷しくして種えたる迹無し。菖蒲の花は可憐なり、名を聞けども曾て知らず」（烏夜啼） ・ 花 文苑英華は「短」とするが、よくない。

一四「明朝 楓樹 老いん」 ・ 楓樹 楓は中国に自生するマンサク科のフウで、「カエデ」というのはモミジのことだが、楓が日本に伝わった江戸時代から誤って「カエデ」と呼ばれた。訳文では必ずしもその俗用を避けない。老木が瘤だらけになるので、あなたも明日は楓の樹のようになりますよ、といっているのだ。杜甫「玉露に凋傷す楓樹林」（秋興）

※前号正誤 第一六六号 一〇頁 八行 古琴曲に五曲九引あり ↓ 古琴曲に五曲九引十二操あり

(一〇一九)

蜀 國 絃

蜀國絃

〔蜀國絃〕 ・樂府詩集は、相和歌辭の部に分類し、梁の簡文帝、盧思道の作について賀の作を載せ、題名は「蜀國弦」とする。簡文帝と盧の作の内容は蜀（四川）が中原と隔絶してはいるが別天地の樂土であることを謳歌する。賀のは道が難路であることと、蜀の女性がそこを離れて旅する悲しみを歌う。

(一〇一九)

○一 楓香り 遅咲きの花が 静かだ

○一 楓香晚花静

錦江の水には 南山の影

○二 錦水南山影

けわしい岩に墜ちかかる猿の叫び哀しく

○三 驚石墜猿哀

竹林をおおう雲は嶺の半ばに愁う

○四 竹雲愁半嶺

涼しい月は 秋の浦わに生まれ

○五 涼月生秋浦

玉のいさごに きらきらと透る光

○六 玉沙粼粼光

どなただろう くれないの涙ながし

○七 誰家紅淚客

忍びぬおもいで 瞿塘峽を過ぎてゆくひと

○八 不忍過瞿塘

○一 〔楓香り 晚花 静かなり〕 ・楓香 楓の樹脂には蘇合香に似た芳香があり楓香脂と呼ばれた。

・晚花 遅咲きの、たぶん蓮の花であろう。梁の簡文帝「晚花と熏風と俱に落つ」（南郊頌序）花を

楽府詩集は「華」とする。

〇二 〔錦水 南山の影〕 ・ 錦水 蜀の都の成都を流れる蜀江で、別名を錦江とも濯錦江ともいう。太平寰宇記「濯錦江は即ち蜀江。水ここに至り、錦を濯えば、錦彩は他江より鮮潤なり」(七二) ・ 南山 成都の南の山。 ・ 以上二句は、蜀都の静かに美しい風景。だが静かに美しい風景のなかに住むことが、誰にもつねに許されるものではない。

〇三 〔驚石 墜猿 哀しみ〕 ・ 驚石 人を驚かすような険しい岩。 ・ 墜猿 哀 墜落するように飛び移る猿の叫びが悲しく響く。墜を曾益の本は「墮」とするが、よくない。

〇四 〔竹雲 半嶺に愁う〕 ・ 唐の太宗「雲凝って半嶺に愁い、霞碎けて高天を緋ぞめにす。還た似たり成都より望みて、直ちに峨眉の前を見るに」(秋日) ・ 竹雲を「行雲」とする本があることを王琦がいう。 ・ ひとつは悲しみ愁う風景のなかにも入って行かねばならぬ。

〇五 〔涼月 秋浦に生じ〕 ・ 涼月 涼を宋蜀本などが「涼」とする。俗字である。

〇六 〔玉沙 粼粼として光る〕 ・ 粼粼 清らかに透きとおるさま。詩経「揚る水、白石粼粼」(唐風揚之水) 未蜀本などは「鱗鱗」とする。 ・ 成都を離れてはるかに漂泊して行く先にも、秋の浦わに涼し

い月は生まれ、宝玉のような砂を清らかな水をとおしてみることができる。静かに美しい風景である。 〇七 〔誰が家か 紅涙の客〕 ・ 紅涙 魏の文帝が愛した薛靈芸は常山郡(河南)の貧しい亭長の娘だった。文帝が美女を求めているのを知った郡長が、父親に大金を与え靈芸を手に入れ、献上したのだ。靈芸は父母と別れるのを悲しみ、車に乗ると涙を唾壺にうけたが、壺は真赤になった。都に着くと壺の中の涙は凝結して血の塊のようだった(拾遺記七) 以来、女性の別離の涙を紅涙という。

○ハ「忍びず 瞿塘を過ぐるに」 ・瞿塘 瞿唐ともいう。長江の奉節県（四川）の東にあり、三峽の門で、兩岸が対峙し、江水がその中を貫き、全蜀江路の門戸に当る。 ・ふるさとを離れても薛靈芸のように皇帝の愛人になるひともいるが、蜀の女たちの多くは、港々の遊郭に売られ、終わるところを知らぬ。瞿塘は彼女たちにとって、故郷との最後の別れの場所であった。

(1010)

### 蘇小小の歌

蘇小小歌

〔蘇小小の歌〕 ・蘇小小歌 不幸な恋に死んだ女性蘇小小の魂魄が、来るはずのない恋人を永遠に待ち続ける歌。歌を錦囊集などが「墓」とするが、よくないだろう。古辞、すなわち古い時代の無名氏の楽府の作品に「蘇小小歌」というのがある。蘇小小は南朝齊のころの錢塘の名妓で、一説では、この歌の作者が彼女だという。その歌は、

我乘油壁車

あたしは女車に乗って

郎乘青驄馬

あなたは青馬に乗って

何処結同心

どこで契りを結びましょう

西陵松柏下

西陵の あの松の下

これは、さらに古い漢代の無名氏の長詩「焦仲卿の妻の為の詩」を念中においた作で、二つは主人公も、表現も、ほとんど対蹠的にちがうが、地上で完成しない愛の結合を地下で完成させようとする女の

願いを主題とする点で共通する。蘇小小は「名妓」とはいうが、同じ名の別人のことを除けば、知られているのは、この短い楽府との関わりだけで、楽府詩集では、次いで李賀の作があり、温庭筠、張祐のもの、これが続く。賀の少し前に、賀の友権璩の父の権徳輿に「蘇小小墓」があるほか、彼女を歌う作品はほとんどない。しかし「墓」があつてそれを歌っているのだから、このころには蘇小小は「名妓」の代表となつてはいたのだろう。とはいつても、徳輿の作品からもあの短い楽府から得た以上の知識は感ぜられない。李賀にしても、初期の作と察せられる「七夕」（一〇〇九）で取り上げた「蘇小小」は、名妓の代詞にすぎない無性格のものだった。ところがこの「蘇小小の歌」における蘇小小は、名妓であれば誰であつてもよいような代詞ではなく、中国の文学の中ではいまだかつて取り上げられたこともない女性の肖像であつて、李賀の発見した人格 (person) としか言いようがない。余りにも独自であり、あまりにも破天荒であるため、多くの読者はこの作品から発する鬼気を感じはしても、鬼気を生みだすもつとなつた密義 (Metaphysik) を理解するものがない。中国においては、つい先頃まで、この詩は退廃唯美の代表とされ、李賀詩の糟粕と罵られてきたのである。その他の評壇においても、大差はない。拙稿「蘇小小」（李賀研究一三）と「鬼時—蘇小小補遺—」（李賀研究終刊号）がそれらにつき詳説する。

(1010)

### 幽蘭の露

啼く眼のよう

〇一 幽蘭露

〇二 如啼眼

同じ心 結ぶものなく

〇三 無物結同心

けむる花 剪るに忍びぬ

〇四 煙花不堪剪



草はしとね

〇五 草如茵

松は傘

〇六 松如蓋

風がもすそ

〇七 風爲裳

水が帯玉

〇八 水爲珮

おんな車は

〇九 油壁車

じいっと待つ

一〇 久相待

冷いやりともし火

一一 冷翠燭

光つかれて

一二 勞光彩

西陵は

一三 西陵下

風しぶく雨

一四 風吹雨

〇二 「幽蘭の露」

・幽蘭 人に知られぬところで咲く蘭。孔子家語に「芝蘭深林に生じ、人無きを以て

芳しからずんばあらず」といい「困窮によって節を敗らぬ」（在厄）という芝蘭が、この幽蘭である。

その幽蘭のような女性である蘇小は、かつてここで恋人と会い、幽蘭はそのゆかりの花、そうして彼

女自身の幻でもあろう。屈原が「時は曖曖として其れ罷らんとす。幽蘭を結んで延佇す」（離騷）とい

ったのは、日が暮れても、受け入れてくれるものもない人が、佇みつくすとき、手にした花だった。蘭

を結ぶことには、離別の意が含まれるかもしれぬと、藤野岩友はいう。・露 詩経「野に蔓草あり、

零露漙漙たり。美なる一人あり、清揚婉たり。邂逅して相遇わば、我が願いに適わん」（鄭風、野有蔓草）

のように、涼しい眼もとの暗喩。羣芳譜は「凡そ蘭には一滴の露珠、花葉の間にあり。これを蘭膏といふ。……多く取れば則ち花を損ず」（四四）という。

○「啼眼ていがんの如し」・如啼眼 啼は、声を放って泣くこと。啼眼は、放つべき声が禁圧されたために、眼から涙となって滴り出た感じを誘い、「如」という直喩法でせき止められているため、その効果が一層強まっている。杜甫「颯颯啼眼開く」（得舍弟觀書）

○「物として同心どうしんを結ぶ無く」・無物結同心 同心は、心を同じように合わせることで、詩經に「睚びん勉同心」（邶風、谷風）といい、易の繫辭に「二人心を同じくすれば、その利きすゝとこと金を断たち、同心の言はその臭かおり蘭の如し」（上）という。そのようななかない交わりを念願して、古辭の「結同心」のように、男女の「契りを結ぶ」という意に定着し、これを賀が受ける。しかし、古詩十九首に「同心にして離居せば、憂傷して以て終に老いなん」（六）と嘆くように、契りもまたさまざま人間世界の条件によって引き裂かれる。それでも同心を結び得れば、老いに至る。老いに至りえぬにしても、「何処結同心」なら、契りを結ぶ場所は幾つかあるわけである、その一つが地下であるにしても。「無物結同心」となると、同心を結ぶべき物がまったく無い。地上はもとより地下にも。

○「煙花えんか 剪きるに堪たえず」・煙花 もやにつつまれた花。さきに引いた古詩（六）の前半は「江を渉わたりて美容を採る。蘭沢らんたく芳草多し、之を采とって誰にか遺おくらんと欲する、思う所ひとは遠道に在り」という。そこで採らうとするのは「芙蓉」であり「芳草」である。遠道にあるにしても同心は結ばれているのだから、送るべき花は芙蓉、すなわち蓮（憐）のように愛情の太陽に照り映え、送れば香りを知る人の確実に存在する芳草である。謝靈運が「瑶華ようか未だ折るに堪えず、蘭苕らんちよう已うに屢しばしば擲なめり」（南樓中望所遲客）と

うたう前の句は、「煙花剪るに堪えず」に極似する。靈運のこの詩は文選に収め、賀は「天上謠」(一〇三七)で瑤草と蘭苕を併用しているのだから、「蘇小小歌」をつくるときこれを念頭においたに違いない。文選の注は靈運の句が楚辭九歌の「素麻の瑤華を折って、將に以て離居に遣らんとす」(大司命)と「石蘭を被て杜衡を帶とし、芳馨を折って思う所に遣る」(山鬼)に基づくことを示す。芳馨は、媚びて相手の心をひこうとするための、素麻はもはや帰ってこないであろう遠くにいる人への最後の贈り物である。藤野が「離別」といったのは、幽蘭に素麻と共通するものを見たからである。ただ、素麻は離別のしるしであるとしても、遠居の人がおのれを思うことは確信されていて、そのゆえに素麻が明確堅固な瑤華(宝石の花)だった。靈運の「遅つ所の客」にも、その信賴がそこなわれていないから「瑤華」なのであって、それなればこそ相手の好意に期待して、楚辭の「芳馨」にあたる「蘭苕」を屢しば摘んだのだ。けれども蘇小小の幽蘭は、硬玉の華ではない。霧や靄につつまれると幻のように消える。それが煙花であり、煙花は、風が去り雨が止めばうつつよりも鮮やかに現れる。それが幽蘭である。沈約「煙花層曲を繞る」(傷春)韋応物「花樹煙華を発す」(龍門遊眺)のような先例があるが、いずれも煙霧のように咲きはびこる花で、賀のものとは同じではないであろう。・不堪剪 賀が「官街の柳帯折るに堪えず」(十二月樂辭正月 一〇二四)というように、ここも剪るに忍びない、切りかねる、の意であろう。古詩(六)の女主人公は「思うひとは遠い」という。「未だ之を思わざるなり。それ何の遠きことかこれあらん」(論語子罕)といった孔子なら、「誰に送ろうとするのか」ということばにも、遠い人への愛情の減退と、花を採ることを止めようとする断念、あるいは言い訳を嗅ぎ取るかも知れない。蘇小小の恋は、無物結同心で、完成の可能性は現在にも未来にも無い。しかし過去においては、

愛、あるいは愛に似たものを示され、それが彼女を恋に導いたのである。愛、あるいはそれに似たものが消えても、ゆかりの花は残っている。それが幽蘭煙花である。幽蘭煙花もまた同心を結ぶべきものではない。死んでも死に切れずにさまよう蘇小小の魂魄さえもがそうであるように。彼女は、無垢無知な処女ではない。醒めた理性は、女を夢中にさせて逃げた男が、彼を待つ女のもとに金輪際帰ってこないことを、知り尽くしている。にもかかわらず、醒めた理性なんぞの忠告に耳を傾けかねる願いが、万に一つもありえぬ彼のやって来る時を待ち、彼の来ぬのが天命ならば、むごい天にさからってその理不尽な天命を功無きものにさせようとまでに物狂おしい彼女の恋心は、ふがない、つれない、つまらない男であっても、そのゆかりの花を剪って離別を示すには忍びぬのである。

〇五 「草は茵の如く」 ・草如茵 茵は車中に敷くしとね。草は蘇小小の乗る幻の車の茵のようだ。謝万「翠草を靡けて網と成す」(春遊賦)の網は茵とおなじ。

〇六 「松は蓋の如し」 ・松如蓋 玉策記「千歳の松枝は、四辺に披起して偃蓋の如し」(呉正子所引)

〇七 「風を裳と為し」 ・風爲裳 風がスカート。屈原「芙蓉を集めて以て裳と為す」(離騷)、傅玄「雲を車と為し風を馬と為す」(呉楚歌)

〇八 「水を珮と為す」 ・水爲珮 河水の音が佩玉の触れあう音のようだ、というのであろう。李白「水は澹澹として烟を生じ、霓を衣と為し、風を馬と為し、雲の君や紛紛として来下す」(夢遊天姥)

〇九 「油壁(辟)車」 ・油辟車 錦囊集などが「油壁車」とし、それがよい。油壁車の油は、油漆、すなわちウルシ。壁は車の壁面。油壁車は壁面をウルシで彩色した美しい車で、もとは夫人、日本でなら女御や更衣にあたる女性専用の車だった。別に「油碧車」というのがある。これは青緑色の紗に油をか

けて半透明にした幕で囲んだ車で「油幕車」ともいい、また油壁車ともよばれ、女性専用の車だったらしい。蘇小小が乗ったのは、この方だったかもしれぬ。

○「久しく相待つ」・久相待 久を明本などが「夕」とするが、誤り。待つことの久しさを歌うのが重要なのだ。相は動詞が対象を持つことを示す接頭語、ここでは「互いに」という意味は持たない。

○九「冷たる 翠燭」・翠燭 燐火（曾益）とも、鬼火（王琦）ともいう。とにかく現実を超えた火が、冷冷としている。

○「労たる 光彩」・劳光彩 その光彩が疲れきり、やがて消える。

二「西陵の下」・西陵下 古辞の句をそのまま用いた。

三「風 雨を吹く（風雨吹）」・風雨吹 蒙古本は「風雨晦」とし、楽府詩集などが「風吹雨」とし、一本に「風雨改」とすると呉正子などがいう。煙花の煙によって雨の来ることが予想はされるが、劳光彩までは雨は降っていない。幽蘭の露は啼眼の如くではあるが啼眼ではなく、蘇小小の心の内部を象徴するけれども、彼女は泣いてはいない。泣くことをこらえて待ち尽くるのである。雨が降るのは、労たる光彩が消え、蘇小小の姿の見えなくなった闇黒の西陵下に、である。闇黒のうちに蘇小小のために啼哭涕泣するものがあり、その啼哭するものが風であり、涕泣するものが雨なのだ。すでに降っていた雨が降り変わったのなら「風雨改」でよからうが、そうではない。風雨晦から直ちに思い起こされるのは詩経「風雨晦の如し、雞鳴已ます。既に君子を見れば、云胡ぞ喜ばざらん」（鄭風風雨）である。風雨如晦は未だ君子を見ざる点で西陵下の蘇小小と共通する。しかし詩経をよく読んだ者なら風雨晦と聞けば反射的に既見君子とつぶやくだろう。古辞「蘇小小歌」にならともかく李賀の作にはどうか。舞台はす

に闇黒である。闇黒は自体が暗いので、それを「晦し」という必要はない。説明すれば闇黒はかえってその暗さを傷つけられるであろう。賀の詩では、闇黒の中で、風が吹き、雨が降るのである。闇黒は、蘇小小の沈黙である。怨恨も悲愁もすべてその内部に吸収する、ブラックホールがエネルギーを吸収するように。風と雨とは、仲良く一つになって蘇小小の沈黙の中に吹き込むのではない。すなわち「風雨吹」ではない。はげしく、風が吹き、はげしく、雨が降るのである。雨が吹き、風が降る、といつてもよい。西陵下の闇黒、蘇小小の沈黙は、忍従でも、あきらめでも、おそらく、ない。それは永遠の女性の永遠のたたかいなのだ。この句はかならず「風吹雨」でなければならぬ。

・李賀は「贈陳商」(三一四一)で「楞伽 案前に堆し」とうたった。楞伽とは仏教經典の『楞伽經』である。その楞伽に「大悲闡提」の説がある。闡提とは「一闡提」のこと。梵語の icchantika を漢字に写した音訳で、意味は「世間的な欲望にひたって法を求めない者」従って、解脱や涅槃を得ることのできない者、である。一闡提に二種ある。一は、一切の善根を焚焼した者。二は、一切衆生を憐愍する者。この第二の者が菩薩であり、十卷本『楞伽經』(魏訳)は次のように説明する。「菩薩は方便もて願をなす。もしもろもろの衆生涅槃に入らずんば、我も亦た涅槃に入らじと。この故に菩薩摩訶薩は涅槃に入らず」つまり一切の衆生を解脱させ涅槃に入れるのをおのれの任務とするために、すべての衆生が解脱せず涅槃に入らない間は、自分も解脱せず涅槃に入らず、世間の欲望に満ちた人たちと同じ姿で、世間にとどまり続ける。これを「大悲闡提」と称するのである。そうして、一切諸法は本来涅槃であるゆえに、二種の一闡提はともに涅槃に入らないのだ、と論理を翻転するが、ここではそこまで立ち入る必要はない。さて蘇小小は、「名妓」とはいえ、性の快楽を売るために恋愛と結婚を禁じられた娼

婦である。彼女はそのような立場におかれながら、禁じられた恋愛を成就させようとして、肉体の滅びた後にも永遠に人間界にさまよう者である。恋愛が禁じられることは、女性であることを禁じられることとであり、女性が女性であることを禁じられることは、人間が人間であることを禁じられることに他ならない。性の快楽を売るために恋愛を禁じられるような女性が存在するかぎり、人間の解放はない。李賀の「蘇小小の歌」は、すべての人間が解放されないかぎり、永遠に自分一個の解放を拒否してさまよう娼婦の立場におかれた女性の魂魄」としての蘇小小を歌っている。これは大悲闡提のすぐれた文学化といつてよい。『楞伽經』には三つの訳本があり、もっとも普及するのが四卷本（宋訳）で、唐代の初期禅僧や、詩人の白居易たちが愛読したものが、四卷本では「大悲闡提」のところ極めて簡略で、その趣旨がほとんど読み取れない。則天武后が訳させた七卷本（唐訳）は、四卷本に較べるとやや詳細で、大意は汲み取りうるものの、鮮明を欠くうらみがある。同じく楞伽經とは名のつても、その主張についてみれば、三本はそれを奉ずる人たちの考え方や感じ方を反映するかのようになり、「大悲闡提」は十卷本『楞伽經』に著しい教えといつてよい。賀の読んだ「楞伽」は、まず十卷本に違いない。

・李賀の「蘇小小歌」は、女性の尽きぬ悲しみを、女性の立場にたつて歌おうとしたもので、この詩の成立する時間は、強いて名づけるなら「鬼時」とでも呼ぶべきものである。蘇小小が来ぬ人を待つて佇ちつくした「西陵下」が何処であるかの論議が、古来いくたびか重ねられたが、それは、たぶん地理的空間ではなく、鬼時と垂直に交差する「鬼処」なのだ。鬼時といい、鬼処というのは、生き残って影のようにさまよう存在の方からする言葉であつて、「生は一瞬、死は永遠」という立場からすれば、鬼時と鬼処こそ、生々として手ごたえのある実存的時間、現実的空間、であるのかもしれない。

(一〇二一)

夢に見た天

夢天

〔天を夢む〕 ・夢で天上にのぼり、その天上世界を描写するのが、この詩の前半で、後半は、天から見下ろした地上の時間と空間のちっぽけなことを歌っている。「天上謡」(一〇三七)もまた天上をうたう作品で、あわせて読めば興味ぶかい。

(一〇二一)

老いぼれ兎 凍える蝦蟇 天上で泣くのだろうか

〇一 老兎寒蟾泣天色

雲の楼閣なかばひらけ 壁が斜めに白く輝く

〇二 雲樓半開壁斜白

玉の車輪は露に軋り 光の球体がじっとり濡れ

〇三 玉輪軋露濕團光

鸞鳳の帯飾り垂れ 天人たち 木犀かおる巷をゆきかう

〇四 鸞鳳相達桂香陌

東方の三神山のあたりでは 黄塵と清水が

〇五 黄塵清水三山下

入れかわり立ちかわり 千年もまるで走り去る馬

〇六 更變千年如走馬

はるかに望めば 中国は ちいさくかすむ九つの点

〇七 遙望齊州九點煙

海原も 杯の中にしたたりおちた 一滴のみず

〇八 一泓海水杯中瀉

〇二〔老兎 寒蟾 天に泣く色あり〕 ・老兎寒蟾 昔から、月面の模様が、ウサギだとか、三本足のヒキガエルと考えられた。



〇二 〔雲楼 半ば開け 壁 斜めに白し〕 ・雲樓 雲を楼閣に喩えている。壁を宝輪楼本が「壁」とし、白を海録碎事が「日」とするが、誤り。

〇三 〔玉輪 露に軋り 団光を湿す〕 ・玉輪、団光、ともに月のこと。

〇四 〔蘭珮 相逢う 桂香の陌〕 ・鸞珮 鸞や鳳の帯玉を着けた天人たち。 ・桂香陌 桂（木犀）の香る巷。月には桂が生えていると考えられた。「李憑箜篌引」（一〇〇一）参照。

〇五 〔黄塵 清水 三山の下〕 ・三山 蓬萊、方丈、瀛州の三神山。史記によれば、戦国時代の斉の威王たちが人をもって海に入り探させたのが初めて、伝えでは、中国の東の渤海にあり、さほど遠くはない。仙人が住み、黄金と白銀で宮殿をつくり、不死の薬がある。遠く望めば雲のようで、近づくと三神山は水の下にあり、行き着きそうになると舟が風に引き離されてしまう（封禅書）秦の始皇がこれを探させたことで有名である。

〇六 〔更変 千年 走馬のごとし〕 ・更変 くるくる変化する。神僊伝によれば、漢代に神仙の王遠と麻姑が出会ったが、食事を進めた後、麻姑が「お接待をしている間に東海が三度も桑畑になりました。さきに蓬萊へ行ったが、その前に較べると半分になっていました」すると王遠が笑って「聖人の話では、海ではもう塵が舞い上がっているそうだ」（太平広記六〇）

〇七 〔遙かに望めば 齊州 九点の煙〕 ・齊州 中国。古代に、中国は九州に分けられた。それが九つのかすむ点に見える。韓愈「下禹の九州を視れば、一塵毫端に集まる」（雑詩）

〇八 〔一泓の海水 杯中に瀉ぐ〕 ・一泓 ひとたまりの水。

・仏教の經典でクマラーラジヴァが漢訳した妙法蓮華經、略称『法華經』に次のような話がある。釈尊

が「自分が仏となつてから無量無辺百千万億那由佗劫になるが、その時間の長さを譬えていうなら、三千大千世界をすりつぶして微塵とし、東のほうに向かつて五百千万億那由佗阿僧祇の国を経過したところで一塵を落下し、同様にして微塵のすべてを落下し終わった時までには経過した国の数はいくらだろう。その微塵を落下させた国と落下させなかつた国とのすべてを合わせ、それをまたすりつぶして微塵としたとき、その一塵を一劫とすると、それが、わたしが仏になって以来の時間なのだ」という。「如来寿量品第十六」にあるのだが、そっくりの話が「化城喻品第七」にもあり、これを「五百塵点劫」という。一劫とは、世界の成立から消滅までの時間の単位だから、途方もない大きさである。李賀の「夢天」には、この五百塵点劫説の影響がありそうである。

(一〇二二)

### 唐児のうた

杜幽公の子

唐児 杜幽公之子

〔唐児の歌（唐歌児） 杜幽公の子〕 ・唐歌児杜幽公之子 この題を、又玄集は「杜家唐児歌即幽公之子」とする。唐歌児は「唐児歌」がよい。すなわち唐児という名の子供の歌である。唐児は杜家の子であり、その杜氏は幽公だと言うのだ。幽は邠とも表記する。又玄集が「幽公」とするのは誤り。李賀の時代に幽公すなわち邠国公として知られた杜氏は杜黄裳（七三九―八〇八）、字は遵素、杜陵（陝西）の人。進士に及第、宏辞に登科し、八〇五年、太常卿から門下侍郎、同中書門下平章事となり、八〇七年、檢校司空、兼河中尹、河中晋絳等節度使となり邠国公に封ぜられ、八〇八年、任地で七一歳で死に、

司徒を贈られた。有能で、政府の威令を地方の軍閥に振るいうる宰相だった。唐児が黄裳の子なら、六四、五歳でできた子であろう。八〇八年には賀は一八歳、これはその前後の作ということになる。

(一〇二二)

頭はぐりぐり蔽つくて 眉は翡翠を刷いたよう

杜ぼうやは 生まれついで の 真の男子

骨相重厚 神気寒烈 廟堂に登る器だ

双の瞳はするどくて 秋の水たち切るばかり

竹馬さやさや 緑のしっぽを揺すってあるけば

半袖の銀色の鸞 きらきらと臂に輝く

東どなりのおきゃんな娘 仲良くしようと

にっこり笑って 唐の字を空に描いてみせる

まなこ大きく 心雄々しく 物分かりいい

忘れるな この歌を作った小父さんの苗字は李だと

〇一 頭玉 硃硃眉刷翠

〇二 杜郎生得真男子

〇三 骨重神寒天廟器

〇四 一雙瞳人剪秋水

〇五 竹馬梢梢揺緑尾

〇六 銀鸞眩光踏半臂

〇七 東家嬌娘求對值

〇八 濃笑畫空作唐字

〇九 眼大心雄知所以

一〇 莫忘作歌人姓李

〇一 (頭玉 硃硃眉 翠を刷く) ・頭玉 頭骨 ・硃硃 堅いさま。 ・刷翠 眉の美しいのを翡翠

の刷毛ではいたみたいだといっている。

〇二 (杜郎は生得の真の男子) ・杜郎 杜君というほどの意。郎を又玄集が「即」とするが、誤り。

・生得 梵語の *Upatītiādika* (生まれたときからの所得) などの訳語。梁の武帝の招きでインドから

渡来した真諦の訳した阿毘達摩俱舍論や唐の玄奘の阿毘達摩俱舍論、略して『俱舍論』にたびたび出

てくる。中国古来の意味は「生け捕る」。それを「生まれつきの」という新しい方向で詩に使ったのは、

賀のこの作が早いのではないか。・真男子 真を一本に「奇」とすると王琦がいう。

〇三 「骨重く 神寒く 天廟の器」  
・骨重神寒 骨相が重厚で神気が寒烈だ。杜甫「大兒九齡色清澈。

秋水を神と為し玉を骨と為す」（徐卿二子歌）  
・天廟 天子の祖先を祭る廟。そこに供えるべき器と

は、廟堂に登る、すなわち国家の重要な祭りや政治にたずさわるべき人物の意。

〇四 「一双の瞳人 秋水を剪る」  
・瞳人 瞳のこと。他人を見るとその瞳に自分の影が映るから云う。

〇五 「竹馬 梢梢 緑尾を揺るがし」  
・竹馬 竹を切って、葉のついた方を後ろにして跨ぎ、馬に乗っ

たまねをする遊び。日本の竹馬もむかしはこれと同じだった。いまのものとは違う。

〇六 「銀鸞 睽光 半臂を踏む」  
・銀鸞 銀色の鸞の模様。  
・睽光 輝く光。韓愈「太白睽睽」（東

方半明）  
・半臂 半袖の上着。

〇七 「東家の嬌娘 対値を水め」  
・東家 東隣の家。宋玉が「天下の佳人、臣の東家の子に若くなし。

然れども此の女、牆に登って臣を窺うこと三年。今に至るも許さざるなり」（登徒子好色賦）といっ

から、そういう女のいる隣家の意に使われる。  
・対値 相手。

〇八 「濃笑 空に画いて唐子を作す」  
・濃笑 濃艶な笑い。濃を又玄集は「含」とする。畫を錦囊集な

どが「畫」とするが、よくない。  
〇九 「眼は大 心は雄 所以を知る」  
・知所以 正しく判断できる。

一〇 「忘るる莫れ 歌を作る人 姓は李なることを」  
・作歌者 この唐児歌を作った人。

夜

1995 02 18

原 田 慶

暮れた街を帰る

北山が薄墨色に波を描き

賀茂川は地の底

人のいるところもないところも

遙かな世界のように無音だ

夜の街が光りながら遠ざかる

バスの中は黙り込んで

見知らぬ人ばかり

わたしはどこへ行こうとしているのか

ふとわからなくなる

待ってくれる人はあるのだろうか

どうしてもっと早く帰らなかつたのだろうか  
急がなければ

どこを訪ねても

わたしを知っているひとを

見つけることはできないかもしれない

バスが木陰の道に入り

レンガづくりの学校の広い窓は

みなぼんやりと暗く

半ばカーテンが開いたまままだ

わたしは不安から覚めようとして

身を起こし目を閉じる

花

々

1995 03 25

原 田 慶

春が遅れたので

白や黄色の花々が

ためらいながら咲いた

冷たい雨がなんども降り

待っていた人は来ず

三月も終りだ

ゆっくり眺める時間もないまま

春は行ってしまふ

メジロが連翹の茂みを巡り

木蓮の花をついばむヒヨドリ

ああどうして嘆くことがあるだろうか  
今ここに極楽浄土はあるというのに

ビワの木が古い葉を落としはじめるのは、春早くまだ風の冷たい季節である。桜の頃に、枝先から白い花束のような若芽を出し、少しずつ伸びて、五月、若葉の候には銀色の矢羽根のように輝く。それが、季節が進むにつれて、気づかないうちに濃い緑のたくましい葉に変わっている。

ビワの実や葉は、古くから薬として使われてきたという。奈良時代には施薬院でビワの葉による治療をしたので、それ以後、寺の庭にビワの木が植えられるようになったとも言われる。わたし達のいる寺の庭にもビワの木が茂っているが、通りから見た人が、その葉をもらいに來ることがある。

ガンの痛みをいやすためと言って何度も來られた人があった。糖尿病の腰の痛みにと來られた人は、最近だ**いぶよくな**っておられる。子宮の病氣に言った人は遠くへ引越して行かれた。神経痛にという人もあった。このように來られる人達が、ビワの葉をどのように使っておられるのかは知らないけれど、『本草綱目』には、次のように書いてある**そうである**。

葉を用いるには火で炙り、布で拭いて毛を去るべきものである。斯くせねば人の肺を射て欬（せき）して止まらざらしめる。この枇杷葉は氣は薄く味は厚く陽中の陰であり、胃を和し氣を下し熱を清し暑毒を解し、脚氣を療ず、また肺熱を治するには**なはだ効あり**。

肺熱の使用方法是

枇杷葉、木通、款冬花、紫苑、杏仁、桑白皮各等分、大黃を減半し、普通のように調治してから粉末にし、蜜で桜桃大の丸にし、食後と就寝時とに各一丸を…

とある。漢方の専門用語は難しいけれど、よく効きそうな氣がする。木通とはアケビの蔓を干したものだそう

である。

江戸時代にはビワの葉湯が大流行し、夏の隅田川畔では絵行燈をかけた「元祖烏丸枇杷湯」を「寝冷え知らず、暑氣払い、胃の薬、肺の薬」と称して売っており、人々は薬効を信じ、熱いビワの葉湯を楽しんだそうだと、前京都府植物園長の麓次郎氏が『四季の花事典』の中に書いておられる。わたしはビワの葉をよく洗って細かく刻み、木綿の袋に入れて鍋で煮出してから、風呂の湯にざっと入れる。湯はピンクがかかった緑から黄色になるが、特別に気持ちがいいということでもない。葉の香りがして少しまろやかになるような気がする。このビワの葉湯も『中陵漫録』という本には「枇杷背を去り、呉茱萸、木香、甘草、藿香各一匁、莪朮一兩、右六味細末して白湯に入れ、暑鬱を発して佳なり、是枇杷湯なり」と書いてあるそうである。

「枇杷葉茶」という物を買っているのを見るけれど、これはよく洗った葉を五分ほど蒸して、刻んで天日でからからに干した物だという。わたしも作ってみたけれど、癖があって、体に効くと考えなければ、好んで飲むよくな味ではなかった。

『漢方と民間療法』というガイドブックに、ビワの葉の痛み止めの使用法が書いてある。ひとつは、ビワの葉の表を火で温め、手でこすってから、痛みのある部分におき、上からカイロで温める。または、ビワの葉を洗って刻み、ひたひたくらいにホワイトリカーを入れて、一週間ほどおくとエキスができる。それに脱脂綿を浸して絞り、痛みのあるところに当て、乾いた布をのせた上からカイロなどで温める。温めた葉がなぜ効くのかというと、葉から微量の青酸ガムが発生し、それが皮膚を通して内臓に作用するからだと思われる、ということである。わたしは、妹の夫がガンで腰の痛みがひどかった時に、ビワの葉をホワイトリカーに浸して持って行った。何度も検診を受けたのにガンが分からなくて、発見されたときには手遅れで、治療の施しようもなかったらしいが、無理に頼んで手術してもらった。あらゆる療治を試みて、一時元気になって退院したが、手術から八カ月ほど後に亡くなった。五十八歳だった。亡くなる前には痛みをとるために麻薬を使われるのだということ、ベッド

の上で小さくなって子どものように夢うつつだった。脾臓ガンは見つかりにくいのだそうである。亡くなってからまもなく三年になる。妹がビワの葉のエキスをどうしたか、とてもたずねることはできないが、たぶん使う余裕はなかったと思う。

昨年暮れに、神経痛で杖を使わなければ歩けなかったという中年の女性が、ビワの葉が欲しいと言ってこられた。その人は、他でビワの葉をもらって煎じたりホワイトリカーに漬けて飲んだりしてよくなったのだそう、ずっと続けておられるのだそうである。その時には元氣そうで、自転車に乗っておられた。大きなポリ袋にいっぱい持って帰られたが、翌日、草花の苗を持ってきてくださった。ジュウニヒトエ、ホタルブクロ、小花のアカノマンマ、ほかに名も知らないものもあった。庭にそのような山野草を咲かせるのが楽しみなのだそうである。また先日は、主人が庭にいるとき、やはり中年の人がビワの葉をもらいに來られたと言っていたので、昨年の自転車の人かとおもったがよく聞いてみると別の人らしい。そのままわたし達は忘れていたが、数日して、主人が妙見堂のお賽銭箱に入っていたと言って小さな紙包みを持ってきた。開いてみると、便箋に百円硬貨が五箇つつんであって、手紙がしたためられていた。

お寺様

一昨日は ビワの葉をたくさん頂きました誠により難うございました 厚くお礼申し上げます 娘が大変喜びまして重ねてお礼申し上げます どうぞ 仏様にセンコウでもお上げしてくださいませ

ビワの葉を頂いた者より

その人をわたしは見えていないけれど、文字を見て亡くなった寺の母を思い出した。律儀者のていねいな文字だった。

だれもが病院に行くことができ、薬を買うことができる今の時代に、ビワの葉で治療をしようというのは、よほどのことである。少しでも痛みをやわらげてあげたいと思う、祈りにも似た心の手当にちがいない。